今月のことば　　令和7年（2025）10月　<No.230>

弘 誓 の 大 船

映画『国宝』は、歌舞伎界を舞台に、役者として・人として生きる重みを描いた作品です。主人公の歌舞伎役者を吉沢亮さんが、そのライバルであり深い絆を結ぶ存在を横浜流星さんが熱演し、二人の間で交錯する葛藤が鮮やかに描き出されました。芸に生きるとはどういうことか、逃げられない舞台に立ち続けるとはどういうことか――観る者に問いかけてきます。

その中で、田中泯さん演じる大歌舞伎役者が稽古中に語った言葉が、強く心に残りました。

「あなた、歌舞伎が憎くて憎くて仕方ないんでしょう。でもそれでいいの。それでもやるの。それでも毎日舞台に立つのが、あたしたち役者なんでしょうよ。」

生きるということは、降りることのできない船に乗って海を渡るようなものです。晴れやかな日もあれば、嵐に翻弄される日もある。どん底に沈んではじめて、過ぎてきた日々が「凪」であったことに気づくこともあります。そして自分のオールの力だけでは、どうしても漕ぎ切れない波が次々と押し寄せてくるのです。

親鸞聖人はそれを、「**生死の苦海**（しょうじのくかい）」と言われました。

生死の苦海ほとりなし　ひさしく沈めるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける　『高僧和讃』

「生死の苦海」とは、果てしなく広がる人間の迷いと苦悩の世界です。
そこでは、自分の力で泳ぎきろうとすればするほど、力尽き沈んでいきます。しかし親鸞聖人が示してくださったのは、**苦海を渡してくださる「大きな船」がある**、ということでした。

それが、「**弥陀弘誓の船**（みだぐぜいのふね）」です。
「必ず救う」と誓われた阿弥陀如来の願いは、海原を渡る大船のように、**迷いや憎しみ・弱さを抱えたままの私たちを、しっかりと乗せてくださる。だからこそ、「自分の力ではどうにもならない」という現実の中で、なお生きていける道が開かれてくるのです。**

弘誓の船はどこにあるのか？　…それは私のオールを捨て、大きな力に委ねてゆくところにあります。その大船があると気づくことこそが、私たちにとってかけがえのない支えとなるのです。憎みながらでも、苦しみながらでも、私たちは弘誓の大船に乗せられて、生死の海をわたっていきます。